

# ボイスポケットⅡ ～ボイロ達の学園生活～

SOD

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ボイスロイドは人として生き、ポケモンと人々が生きる世界。タマムシ学園初等科に入学した少女達の物語。

完敗した結月ゆかりに勝つために強くなりたい東北きりたん。

【ホウオウの巫女】という、ポケモンと人間と世界の平穩の為のお役目を果たすに相応しくなるべく勉強のために訪れた琴葉茜。

離ればなれになった姉と共に居る時間を守り、ポケモンコンテストの勉強がしたい琴葉葵。

そして、三人より先に入学していた子どもアイドル。音街ウナ。

更に、前作の事件により観察対象となった二人に近づく為に実年齢を偽って初等科に入学した

【ポケモン教会】の方相氏、役追儺ー如月ついな。

それぞれがそれぞれの目的や将来のために勉強するべく入学したタマムシ学園生活編。

始まります。

※この物語は【ボイスロイド×ポケットモンスター ボイスポケット】の第二部作です。が、

一部は丸々プロローグのような状態なので、分からない設定などがありましたら、前作を読むよりコメントで質問貰った方が早いと思います。

## 目次

1. ウチはついな。大人のレディ	1
2. ウチはついな。おとなのレディ	8
3. ウチはついな。おとなのれでい	14
4. こ・・・この少女・・・いったい何たんなんだ!?	25
5. ちゅわ!?もしかしてワタクシ・・・既に!??	30
6. タمامシ学園入学式。	36
7. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅰ（音街ウナ 琴葉葵 役ついな 登場） 後書きにきりたんの水着挿絵追加しました。意味は無い	40
8. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅱ（音街ウナ 琴葉葵 役ついな 登場）	47
9. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅲ（音街ウナ 琴葉葵 琴葉茜 役ついな 京町セイカ	52
10. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅳ（音街ウナ 琴葉葵）挿絵有り	58
11. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅴ（音街ウナ 琴葉葵 如月ついな）	67
12. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅵ（音街ウナ 如月ついな 琴葉葵 琴葉茜 新キャラ） 挿絵・可愛く描けた茜ちゃん・有り	75
1?・5 ずん子のデレ期【微ゆかずん】（結月ゆかり、東北ずん子 弦巻マキ 登場）	84



快適な旅をお届けする車内には、なんと二人の少女のために貸し切られていた。

「……………」

一人はむつすりとした顔で向かいの席に座る女性を睨んでいる、灰色の長い髪のとてもしゃな少女。

少女が睨む相手もまた、低身長であることは疑いようも無いが、首から下の成熟した果実によりしっかりと大人の女性であることが見受けられるシヨートヘアの女性だ。

「……………」

「……………<sup>えんの</sup>役ついな。いつまでわたしを睨んでいても、今さらこの仕事からは降りられないぞ。切り替えていけ。」

放っておけばいつまでも自分を睨んでいそうだと思つた小さな女性は、諭すように目の前の小さな少女に話しかける。

「別に、ウチはこの仕事を降りようなんて気はサラサラ無いわ。」

「なら、いつまでも私を睨むのは止めてくれ。話が進まない。」

「睨みたくもなるわあああああー!!!」

ドツカーンと爆発したように少女は大声で怒鳴る。

「なんつっつっで!!ウチが!!!初等科やねん!!!」

お行儀悪くシートの上で土足のまま立ち上がる少女。立ち上がった勢いで思いつきり露出したヒメグマさんパンツを他の誰かに見られることが無かつたのは幸いだつただろう。

「ウチもう14歳なんや!!じようがぐぜいじゃないもんんんん!!!」

うわあああーんと床に顔を伏せて大泣きしはじめる少女。

床に伏せる勢いでスカートが捲れ上がったままパンツ丸出しで泣いている。

つい先ほどの光景と合わせて、彼女が小学生を名乗り疑いを持つのは、シャーロック・ホームズでも荷が重い。

そんな彼女は、己だけは是が非でも14歳を主張する。

「仕方ないだろう、これからの任務を考えれば、観察対象が入学する初等科に入学するのが最も効率が良いのだから。」

「効率エエの分かる。」

「だが本当に初等科の適性年齢のトレーナーをこんな任務に就けるわけにはいかない。」

「危ないの分かる。」

「ならば納得だろう。貴様の配属はタمامシ学園初等科だ。」

「iiiiiiiiiiiiiiiiいやあああああああじゃあああああああああ  
ああー」

惨めに情け無くオンボロボロと泣くこの小さな幼女ーもとい、少女は未だ抵抗の意志を崩さない。

ハア・・・とため息一つ零れる。

タブレットを操作し、資料を呼び出す。最早半分は現実逃避に近い心境で。

「タブレット表示内容」

-----

【ポケモン教会】 任務リスト

ポケモンと共に育てられた少女。

先天的にしか持ち合わせないとされる【ポケスキル】の原初【ゲンシスキル】を持つとされているが、その力は彼女の支配下にはないらしく、意識的な発動は確認されない。

トレーナーとしての実力、今回の任務に対しての親和性は全て無視し、ただ幼女っぽい見た目だけで採用されているため、基本的に観察対象2名との交流以上のことを教会は求めない。

同行員、京町セイカには、現場の判断で動き、適切な対処を求む。

-----

セイカ「……………」







真っ赤に膨れあがったお尻は、空気が触っても痛いたため、一張羅の紐パンはやむを得ずポケットに入れるハメになったついな。

仕方なくポロポロと涙を流しながらお外へ向かうのだった。すり足で。

セイカ「ん？ああ、ようやく来たか。入学式まであと1時間だ。

タمامシシテイまではバスで行くぞ。バス停はこちらだ」

ついな「……………」

ついな（あいつ、絶対赤い血が流れてへん）

またも置いてきぼりを喰らった。

なお駅の外に出るまでに地味に5分も掛かった。都会の駅は兎角ひろいのだ。

ついな「このままじゃウチの何の罪も無いおしりが血を吹いてまう……………」

熱を持ったお尻を気遣いながら、腰に下げたモンスターボールを開く。

「ぶるるる……………」

モンスターボールの外に出てすぐ、カラダをブルブルと震わせてカラダを伸ばすのは

ひのうまポケモン。ポニータだ。

ついな「デイクソン、ウチのこのつけてあの血も涙も無い鬼の後ろ付いて行って……………」

デイクソン「ぶるるん。」

首肯すると、ついなが乗りやすいようにカラダを伏せるポニータのデイクソン。

小さなカラダで小さな主を乗せて、気遣うように歩き、セイカの後を付いていく。

セイカ「バス停につくまでに、電車内で私が話した資料が頭に入っ

ているか確認しておこう。」

ついな「あんなハリテヤマにお尻どつかれとつた時に言われた情報なんて耳にはいっとるわけないやろ!？」

セイカ「だから初めから我が儘を言わずに聞いていれば良かっただろう。」

幸い移動時間が暇だから説明出来るが、もしも不測の事態が起きてしまえば、前情報も無しで潜入する事にもなりかねないんだぞ。」

ついな「せやからってハリテヤマに200発もぶたすか普通!？」

セイカ「あれだけ絶叫を上げていて大まかに回数を覚えていたのは素直に賞賛するが、その責任は半々だ。」

ともかく、もう一度説明するから、頭に入れていけ。この資料は持ち込ませるわけにはいかないからな。」

ついな「はあ……分かったわ。……」  
うう……」

未だ初等部編入の葛藤は絶ちがたいが、またお仕置きハリテヤマを喰らうのは御免被る。

そんなわけで、遺憾ながら受け入れる方の分岐点に足を踏み入れた。

## 2. ウチはついな。おとなのレディ

タمامシシティ行きバスに乗った役ついなと、京町セイカの2名は、資料を確認しながら、これから必要になる情報を共有していた。セイカ「まず一枚目の資料。」

これが、一月前のタمامシ学園校門前の惨状だ。」

資料の映像には、コンクリの舗装が陥没、ひび割れ、黒焦げなど、とても学び舎の顔である門の前とは思えない状態が映されていた。

ついな「これが今回のヤマの……レインボーロケット団。とても人の心のあるものの所業や無い……なるほどこんなことをするような奴らが敵なのか。」

14歳の自分が初等科に無理矢理入学してまでの観察警護。決してプライドを優先してぶつくさ言っている場合ではないと納得するついな。

ついな「……ごめんな、セイカはん。たしかにこんなことをするような敵がおるんなら、ウチみたいな大人のれでーが初等科に配属されても、文句なんて言うところの場合やなかった。

ウチの考えが甘かったわ。」

沈痛な面持ちで自らの非を詫びたついなに、セイカは――

セイカ「第二の資料を見てくれ。これが校門の前の何割かをぶち壊した張本人の一人、観察護衛対象の『東北きりたん』だ。」

ついな「さよか。これが門の前をぶっ壊した観察護衛対象の……今なんて言うたん???」

セイカ「もう一度言うぞ。」

この資料二に写る小学生が『東北きりたん』。今回の観察護衛対象の一人にして

――校門前の惨状を作り出した張本人の一人だ。」

ついな「うええええええええええええ!??これやったん、ロケット団ちゃうの!??」

こんな人でなしの所業やん!?明らかに敵側のやるやつやん!!」  
セイカ「ああ。本来ならこれだけの騒ぎを起こせば、何かしらの罰くらいはあるものだが、【ポケモン協会】の判断は護衛だった。

一応補足するが、これは彼女一人の破壊では無いし、敵が法律上は殺処分推奨の【ポケモン悪徳利用者の人権剥奪法】に沿っている行動が原因であることもあった。

が、それは『結月ゆかり』の決定だ。」

ついな「結月ゆかり……たしか、【協会】と【教会】の双方からチャンピオンクラスの実力者と認定するSランカーのトレーナーやったか」

セイカ「そうだ。あの場には【紫毒】のゆかり。更に【雷火】のマキがロケット団の掃討に関わっている。そして、アローラの元国際警察クチナシから推薦で入学していた【悪桃】あくとうさとうささらも居たらしい。

それらすべての情報が、『結月ゆかり』個人の指令により絶対黙秘となっている。」

ついな「Sクラスのトレーナーって、そんな権限があるんか?」

セイカ「いや、普通は無い。Sクラスはあくまでトレーナーとして最大限自由に行動出来る権限はあるが、政治的、マスコミ的な管制権限は何も無い。

つまりこれは、『結月ゆかり』に対する畏れによる恐喝だ。

刃向かえば【紫毒】が自分たちに向く。それだけで支配の位置にいる。」

ついな「それ、とんでもないことなんやないの?」

全てがそのゆかりはんの思うままやないの」

セイカ「……」。

沈黙するセイカ。その表情はどこか悲しげだ。

ついな「……」。

セイカ「……元はと言えば、【ポケモン悪徳利用者の人権剥

奪法」も、結月ゆかりの作った法だ。もしも【紫毒】が世界を支配したいと考えているのなら、その法は邪魔になる。

何を考えているのか誰にも分からない、天上のトレーナー。

嫌う者も数多い。

だが………」

ついな「だが？」

セイカ「………あの人は悪人じゃないんだよ。」

ついな「まるで知り合いみたいに言うんやね。」

セイカ「向こうは、私のことなど知らないがね………」

—————

セイカ「さて、話を戻そう。

東北きりたん（11）。ホウエン地方出身。

手持ちポケモンハガネールのカラダの大きさを利用して戦うパワーファイター型のスタイル。

学園の監視カメラの映像では『アイアンテール』を多用している。

が、最近ハガネールはポケモンセンターで療養中らしい。」

ついな「さつき言うてた観察護衛対象の一人やったね。」

セイカ「ああ。最新の情報では、結月ゆかりの弟子として修行しているらしい。

そして、資料3の少女が、同じく結月ゆかりに弟子入りしている少女。

琴葉茜。」

ついな「可愛らしい子やね。さつきのきりたんってこと違ってお目々ぱっちり、男の子にモテそうやなー」

セイカ「彼女は『ホウオウの巫女』として選ばれた少女だ。

元々はホウオウに仕える三犬『エンテイ』『スイクン』『ライコウ』のトレーナーだが、入学に際して一度彼女の手元を離れているらしい。」

ついな「『ホウオウの巫女』？何やのソレ。  
ウチらと同じ【ポケモン教会】の人間なん？」

セイカ「ああ、琴葉茜は【ポケモン教会】の柱の一つ。【虹彩の聖火】  
が祀る神『ホウオウ』が、極めて稀に選定されると言われる伝承だ。

ホウオウが彼女の元に降臨した暁には、祭祀よりも高い権限を持つ  
が、常時は『スズの塔』の最上階で祈りを捧げるか、舞子としてのお  
稽古や、ホウオウと共に戦う際に力となるべくトレーナーの修業に勤  
しむくらいしかやる事が無いらしい。

オマケにホウオウが選定しない限りは空席の役職。

だから、特に隠されてもない役職にも関わらず、『ホウオウの巫  
女』自体、教会の高い地位の者や、地元のお年寄りくらいしか知る者  
がいないらしい。」

ついな「なるほどなく」

セイカ「個人的なデータとしてはこちらだ。」

琴葉茜（12）

カントー地方出身。ホウオウに見初められて以降、ジョウト地方に  
在住しているため、双子の妹の琴葉葵と離れ離れに暮らしている。

個人的な手持ちは『メタモン』1体。

才能も高く、日頃から高いレベルの手ほどきを受けていることもあ  
り、バトルの手腕は子ども離れしている。

ついな「ふむふむ。ウチと同じ天才タイプやな！」

セイカ「……………」。

皆無な胸を張るついなに、ハイライトが消えた目で笑うセイカ。

ついな「ほんで、この二人が主な観察対象であって、先月の戦いで  
中心になっていた子達なんやね。

あれ？この子ら……………東北きりたんと琴葉茜。年齢が一つ違

いやけど、ウチはどっちの子のクラスになるん？」

セイカ「ん・・・ああ、それは心配要らない。

タمامシ学園は『初等科』『中等科』『高等科』に分かれるが、それは入学時の適性年齢によって三年ごとの区分にされるものだ。

その中から実力や専門分野ごとの授業こそ行われるが、同じ時期に入学した者の学年クラスは同じだよ。

ほら、これが今年の名簿だ。」

見せられた名簿のなかには、確かに『東北きりたん』『琴葉茜』そして・・・『如月ついな』の名前があつた。

ついな「・・・如月・・・か。」

セイカ「ああ。【教会】に登録している『役ついな』では、いざという時に行動に制限がかかるかも知れないから、本名で席を入れた。」

ついな「まあ、ええけど。」

セイカ「そうか。」

観察護衛対象の2名の他に、今後動向次第で対象の範囲内にはいるかもしれない者が2名いる。

あの日芽立ちはしないが戦いには参加していたらしい2名だ。

琴葉茜の妹の『琴葉葵』と、アイドル活動をしている『音街ウナ』だ。」

ついな「ああ、音街ウナならウチも聞いたことあるわ。

マツギョの帽子被って『ドラゴンー!!!』って言うところけつたいなアイドルやね。」

セイカ「ああ。最近アイドルを休止して学業に集中すると発言してファンが騒然としていたな。」

ついな「へえくアイドルを休止か」

《次はくタمامシステイポケモンセンター前ー。次はくタمامシステイポケモンセンター前ー。》

お降りの方はボタンを押してお知らせくださいー。》

ピンポーン。

次、止まります。

バスを止めるボタンを押したセイカは、タブレットを仕舞い、つい

なに向き直る。

セイカ「もうすぐ到着だ。準備しろ。」

ついな「はいよー。って言うても、リュック背負えばそれで完了や。後何分かの停車までの時間を待つばかりが準備やな。」

「……………最終確認だ。」

『東北きりたん』『琴葉茜』『琴葉葵』『音街ウナ』

この4名と親睦を深め、命令あれば彼女たちを保護し、状況に応じ対処せよ。

役ついな、これが今回のお前の任務だ。

後は、くれぐれも悪目立つなよ。」

《タママシシテイポケモンセンター前》。タママシシテイポケモンセンター前でございます。お降りの際はお忘れ物のないようお願い致します。》

バスの扉が開き、他の乗客と一緒にセイカが降りる。

ついな「ああ。ウチかてプロ。

悪党ハンターの方相氏、えんのついな役追儼や。

やるときやる。しつかりみせたるでー。

悪目立ちなんてもつてのほkー」

ハツハツハと笑いながら、セイカの後に続き、バスを降りたついなは。

「カンビイイイイイイイイイイイイイイイイイー!!!」

ついな「え？ほびゅー………」

一般通過したカビゴンとの人身事故に巻き込まれてぶっ飛ばされたのだった。

ついな「なんでやあああああああああああー………!???



### 3. ウチはついな。おとなのれでい

バスから降りたと思ったたらカビゴンにぶっ飛ばされた少女がいるらしいぞ。

おいおいおい、何ソレ死ぬわ。

．．．．．それがさあ。

え？何??頭砕けてるとか？

今、その少女、そのカビゴンをぶっ倒す!! ってバトルしてるらしいぜ、ポニータと。

ファッ!?!?なんだそりゃ!!

「．．．．．何だそりゃ。」

タمامシデパートの噴水前で自身の胴体ほど大きい本を読んでいた少女が、たまたま聞こえてきた噂話に対して、独り言で突っ込んだ。

「．．．．．そう言えば、最近この辺でカビゴンが居眠りをして道を塞いでいることがあるとか言っていましたね。」

バタン。

立ち上がって、大きな本を片手で無造作に閉じると少女は、師匠の教えに従って頭を回転させ始める。

(子どもがカビゴンと戦闘なんてことになれば、この辺がこんなに静かなのはおかしい。

となると．．．バスから降りた。バス停付近。

このタمامシシティでバス停。そしてここから遠いつてなると．．．．．)

「．．．．．タمامシシティポケモンセンター前。」

結論付けた少女は、デカイ本に書き置きを遺し冷やかしがてら観に行くのだった。

-----

ついな「ううううううううおおおおおおりやあああああああ  
あぁー！！！！

かえんぐるまあああああ！！！！」

デイクソン「ブ・・・ブルルン！」

マスターのついなを下回る小さなカラダに炎を纏わせて突進する  
のは、デイクソンのポニータ。

カビゴン「カビツ！！」

カビゴンは小さなポニータの激突を脂肪の詰まった腹で受けてば  
よん反射する。

デイクソン「ぽにつ!？」

ついな「くつそおおおおー!!あんのでかつぱらああああー!!!

絶対ギツタギタにしたるううううううー!!!」

「いいぞー嬢ちゃんー!」

「がんばれーお嬢ちゃんー!」

ついな「みなさんおおきにー!!この役ついなちゃん!!マチを騒がせ  
る迷惑なカビゴンを見事退治したるでー!!応援よろしゅうなー!」

「「「ぶうううううううううー!!!」」」

ついなの啖呵に大盛り上がりの観衆。

ポケモンセンター前のこの場所はすっかりショーの舞台と化して  
いる。

そんな光景を見たセイカは

セイカ「・・・・・・・・・・・・・・・・悪目立ち・・・・・・・・するなっ

て・・・・・・・・言っただろう・・・・・・・・」

頭痛が痛い頭を抑えて、悲痛な呟きを独り零した。

小さなカラダで脚力を駆使して俊敏に立ち回るデイクソン。

街中の特徴のコンクリート床や建物の壁を蹴り、かえんぐるまで激突しながら少しずつ体力を削っていく。

一方カビゴン。巨躯を駆使してデイクソンの攻撃を受けながら『かいらき』で応戦する。

一撃一撃はコンクリートを砕き、小さなポニータのカラダに当たれば一撃で屠れるのは想像に難くない。

攻撃が当たっても決定打にならないデイクソンと、一撃必殺が当たらないカビゴン。

両者のバトルは、どちらかのバランスが崩れないことには決しない。

だが、ついなの方に焦りはない。

ついな「デイクソン。焦らず確実に当ててくんや!!」

デイクソン「ポニー!!」

カビゴン「カンビ……」

ここで、攻撃が当たらないカビゴンが動く。

いや、止まった。

腰を下ろして目を瞑る。『ねむる』だ。

ついな「なんやて……!?この戦いの真っ最中にねむる!?!」

単にダメージが大きかったにしても、カビゴンの性格上の問題にしても、これはチャンスだ。

そう判断したついなは、攻め方を変える。

ついな「寝たら暫くは起きんのがねむるや!!デイクソン、大技行く

で!!」

デイクソン「ブルルルルン!!」

ついな呼びかけに、一度立ち止まったデイクソンは、これまで纏っていたよりも大きな炎をカラダから燃やす。

「おおお!!すっげえ炎だ、あのポニータ!」

「まるでジムリーダーみたい!!」

「隙だらけだぞー!一気に決めてやれー嬢ちゃん!!」

ついな「準備は出来たな、行くでデイクソン。」

方相炎・激突!!」

「デイクソン」「ヒヒイイイイイイイイン!!!」

ダン!!と一層強く地を蹴り直進したデイクソン。周囲の酸素を燃やし、自身の出来うる最大の火炎をカビゴンに叩きつけるー

その瞬間。ゴオオオオ・・・という音が聞こえ、カビゴンがカラダを起き上がらせた。

ついな「バカな!?起きたやと!!」

そして、自身の最重量要塞の巨軀を、全霊を持って撃ち込む!!!

デイクソン「ヒヒン!?!」

ドツカアアアアアアンー!!!

デイクソンがカビゴンの衝突の衝撃でビルに叩きつけられ、ひんし寸前のダメージを負った。

ついな「デイクソン!!」

「な、なんだ今の!?急にカビゴンが起き上がったぞ。」

「ねむるって寝たら暫く起きないんじゃないのかなか?」

ざわつく観客の声をよそ目に、セイカは状況を飲み込んだ。

セイカ（恐らく今のは、『ねごと』そして出たワザは『すてみタツクル』。このカビゴン、一体何なんだ?すてみタツクルは偶然だが『ねむる』と『ねごと』は意図的だ。

戦略的なバトルを野生のポケモンがやるなどと・・・)

デイクソン「ぷ……ぷ……ぷるる……」

ついな「デイクソン、大丈夫か？」

デイクソン「ぶる……」

立っているのもやっとなデイクソンを支えながら、『きずぐすり』を使う。

ついな「ごめんなデイクソン。うちのおこづかいじゃ、これが精一杯なんよ……」

デイクソン「ぶるるん。」

ぐうぐうと寝ているカビゴン。一度ねむれば暫くは起きない。

ついな（一応、フレアドライブのダメージは、カビゴンに入っとる。かえんぐるまが何回か入ったところでねむるを使ってきたつちゆうことは、フレアドライブと同じくらいの威力のワザをあつて3発……いや2発も入れてやれば倒せる……）

だが、フレアドライブをもう一度当てても倒せない以上は、何か別のワザを当てるしか無い。

反動ダメージや、タイミングを合わせてすてみタツクルをやられれば、今のデイクソンには、命に関わるダメージになりかねない。

セイカ（つまり、手持ちのポケモンを案じれば、二回ともフレアドライブは使えないまま二回、フレアドライブ相当のダメージを、すてみタツクルの範囲外からぶつけるしか無い。）

「どうするんだ？あのおじょうちゃん。逃げるでも無くカビゴンを見てるけど、あのポニータはかなりやられちまつてるぞ。他にポケモンいないのか？」

いるわけが無い。

役ついなは、月額300円の小遣いでやりくりする女。【教会】の後ろ盾で育成費は補助して貰えても、月に一度モンスターボールを買うのが精一杯な少女に、他の手持ちなど望めるわけも無い。

役ついなは、デイクソン一体で戦うしかない。

セイカ（どうするんだ？<sup>えんの</sup>役）

ついな「……………デイクソン！ソーラービーム発射用意！！」

デイクソン「ぶるる！！」

ついな（やるしかない！！目を覚ます前に、起きてされる前に、打ち倒すしか無いんや！！）

太陽光を吸収し、一気に放つ草タイプの大技。『ソーラービーム』。街中とは言え拓けて太陽の光も差すこの場所でなら何とか放てる。

「ソーラービームだって!?フレアドライブと言いつつ、あのお嬢ちゃんいったい何者なんだ!?!」

「よっぽど歴戦のトレーナーでも無ければ使いこなせないようなワザばかり……………」

ポケモンに覚えさせるだけでも、トレーナーの力量や資金が必要だって言われてるのに……………」

観衆が思い思いに話をしていると、ようやくデイクソンのチャージが完了した。

セイカ（だが、ダメだ。遅い……………コレでは2発目が間に合わない）

ついな「厄難災禍悪疫即祓、邪気病魔凶鬼即滅……………」  
方相草・<sup>ソーラー</sup>陽光波<sup>ビーム</sup>!!」

光を吸収したツノから放たれた光弾がカビゴンに向かう。

ズドンツツ!!!!

カビゴン「——!!!」

未だ眠りから醒めないカビゴンだが、ダメージはある。だが………

セイカ（だめだ、役。コレでは足りない。時間も、ダメージも！）

ついあ「デイクソン！すぐに光を吸収して!!」

デイクソン「ヒヒイイイーン!!」

ついなのの指示に再度光をためるデイクソン。

セイカ「………つつ!!」

伝えるべきなのだろうか？セイカは迷う。

このまま行けば確実に、デイクソンはカビゴンに勝てない。

セイカ（役はおそらく、ソーラービームをフレアドライブと同等の威力、そしてダメージを与える物と考えている。だが、タイプが一致していない草タイプ、そして………）

パチン。

カビゴンが目を覚ました。

ついな「デイクソン、チャージはまだか!？」

デイクソン「（フルフル……）」

首を横に振り否定する。

カビゴンは少し間を置いてデイクソンとついなを補足する。

カビゴン「カンビイイイイイイイイイイイイイイイイイーン!!!!」

そして突っ込んでくる。すてみタックルだ。

ついな「もう少し……もう少しや……!!頑張つてや、デイクソン」

デイクソン「フツシュウウー!!」

突っ込んでくるカビゴン。遅い。重いから。だが怖い。

カビゴンほどの重量と質量をもつポケモンが真つ向から突っ込んでくるのだから。

チャージもまだ終わらない。もう少し、もう少し………！  
そして………。

デイクソン「ヒヒイイーン!!」

チャージ完了の鳴き声を上げた。

ついな「行くでデイクソン!!これでトドメや!!  
方相草・陽光波!!!」

セイカ「ぐっ!ダメだ役!!カビゴンのとくしゅぼうぎよの前では、ソーラービームではダメーヅが足りない!!」

ついな「何やて!？」

セイカ「ーっつ!!」

セイカの遅すぎる忠告虚しく、デイクソンのソーラービームは発射された。

いつそ何も言わなければ、攻撃に集中出来ただろうに、最悪のタイミングで。

もう間に合わないのだから言うべきでは無かった。

セイカとて言わないつもりだったのに、咄嗟に口が開いてしまった。

撃たれたソーラービームはカビゴンを飲み込み、ダメーヅは与えていた。

足も止まった。だが、進撃が止まらない!!

一瞬だけ足を止めても、再び進むだけ。

カビゴン「ゴオオオオオオオン!!」



ついな「デイクソン!!避けて!!」  
デイクソン「ブル…………っ!」

ついなの悲痛な叫び虚しく動けない。ソーラービーム二連続の負担は、デイクソンに回避の余力を…遺してはくれなかった……。

ついな「いやあ……!やめてカビゴン!!もう降参やア!!」

無慈悲な巨弾となったカビゴンは止まること無く、デイクソンは倒れ伏した。

潰される。潰されるきつと確実に潰される。

ついなの大切なパートナーは、肢体を碎かれ、見るも無惨な命だった物へと変わるのだ。

潰される。潰される…………ツブサレル…………

ついな「デイクソン!!!!」

だからついなは身を挺した。

倒れたデイクソンに覆い被さるように。

「お嬢ちゃんダメだ!!逃げろ!!」

「きやあああああー!!」

セイカ「えんの役!!!!」

たまらずセイカも駆け出すが、目立たぬように遠巻きに見ていたのが裏目となり、絶対に間に合わない。

なにより、この人ゴミが邪魔だ。

間に合わない。これはもう確定だ。

カビゴンは飛び上がる。確実に敵を仕留めるために、己の持つ全身全霊の威力を込めた……………  
最大のすてみタツクル。

セイカ「クソツツ!!退いてくれ!!!」

もう諦めろ、役ついなは……………ツブサレル。

セイカ「止めろ!!やめろおおおおおおおおー!!!」

「地底<sup>そこ</sup>から燃ゆる静かなる熱ー」

その時誰かの声があった。

「星<sup>チ</sup>の欠片<sup>リ</sup>を融かしたハガネの螺旋」

その場にいる全員の耳に確かに届く声があった。

「玉響<sup>たまゆら</sup>の衝撃<sup>こえ</sup>は私の覚悟<sup>こころ</sup>!!!」

何か出来るというのか？誰も間に合わないこの状況で……………

!!

どつつつかあああーん!!!!

コンクリで出来た床を粉碎した音がした。

誰もか思う。

ああ…間に合わなかったんだと………



「ああ、お疲れ様。リオまる。」

リオまると呼ばれた人影ーポケモンのリオルが、トレーナーと思われる少女に手を伸ばし引き上げた。

暗く深い穴の中から出て来たのは、やはり少女で、その背丈から初等科であることが分かる。

少し赤めの髪、ノースリーブのパーカーを着た少女……。

カビゴン「カビイイイイー！！！！」

セイカが顔を確認する前に、仰向けになっていたカビゴンがカラダを起こし咆哮を上げた。

それまでついなどバトルしていた時とは明らかに違う、殺気の籠もったオーラを放ち、バキバキと地面に亀裂が入っていく。

セイカ「様子がおかしい……みんな逃げろ!!このカビゴンは危険だ!!」

野次馬達もさすがに異常に感じたのか、蜘蛛の子を散らすように逃げて行く。

恐らく何人かは安全なところまで逃げて観戦するんだろうが、とにかくその場に残ったのは

カビゴンにボロ負けして腰を抜かしたついなど、付き添いのセイカ。

そして、2人の前に立つ少女だけとなった。

「まだ瀕死にならないか。いや、当たり前か。」

ポニータのソーラービーム位じゃ、殆どダメージなんて無いだろうし」

「リオウツツ!!」

「ああ、そうですね。どうせ暇してたんですし、少し『ミット打ち』でもしますか。」

行け、リオまる」

やる気に満ちた声で鳴きながらカビゴンに突進していくリオル。  
それを向かい撃つカビゴン。

カビゴン「ゴオオオオオオオオオオオオオン!!!」

セイカ「初めから『すてみタックル』か!」

リオルのトレーナーはどう指示を出すのか?

泥だらけのついなと共に見守るセイカ。しかし……………

ト・レ・ー・ナ・ーが指示を出さなかった。

だがリオルはカビゴンのすてみタックルを『みきり』で紙一重に避け、すれ違いざまに一撃をお見舞いしてみた。

セイカ「どうしたんだあのトレーナーは…………リオルになんの指示もしないのか?」

ついな「リオルの方も、全くそれに動じずに、自分で闘つとるみたいやね……………」。

2人が唾然としている間にも、二体の攻防は続く。

カビゴンが『のしかかり』や『アームハンマー』で物理的にリオルを潰しにかかり、リオルが避けて一撃を入れていく。

ついな「これは、ウチとデイクソンのバトルと同じ動きや」

セイカ「いや、よく見ろ。カビゴンの様子がおかしい。」

ブウン!!!

カビゴンの攻撃が僅かに掠り、手傷を負うリオル。そして、同じく一撃を入れていくリオル。

だが……………

ついな「カビゴンの顔が、ドンドン辛そうになっていつとる?」

セイカ「ああ……………同じようにただパンチを入れてるだけ。」

考えられる可能性はただ一つ。リオルが使っているワザ。使えば使うほど力を増幅させるワザ。『グロウパンチ』

カビゴン「カ……ツビ……!!」

気付いた時にはもう遅い。ここから眠っても、目が覚める頃には死んでいる。

ならば……!!!

カビゴン「スウウウウウウウウー」

大肺活量の深呼吸で力を込める。

「……………リオまる。打たれる前に決めなさい。

アレぶつ放させたら私が怒られる未来が見えます！」

リオまる「リオウ!!」

ダンツツツ!!大きく地を蹴り、瞬時にカビゴンの懐に入り込みー

「きあいパンチ!!!」

カビゴンの頭と贅肉の僅かな隙間にある喉元に、かくとうタイプ最強の一撃が容赦無く叩き込まれた!!!

カビゴン「カ…………………グ……………」

声を上げる事も出来ず……カビゴンは倒れ伏した。

そしてー

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオンー!!!!!!

気絶したまま、カビゴンが溜めていた『はかいこういせん』が暴発し、カビゴンの巨体が吹き飛ばされていった。

セイカ「な．．．．．」  
ついな「んなアホな．．．．．」

「風船かよあいつ。」

爪痕だけを残して吹き飛んでいったカビゴンがいなくなり、残されたのは．．．．．。

ついな「  
セイカ」

「さて．．．．．そろそろ戻らないと面倒に．．．．．」

「あああああー！！！！おったあああああー！！！！」

「ああ．．．もう遅いか。」

呆然としていたついなとセイカの前に、桃色の髪の少女が駆け寄る姿が映り．．．．．。

「きりちゃん酷いー置いてったあー！！」

「あーはいはい。分かったから帰りますよ。茜」

役ついな。

東北きりたん。

琴葉茜。

本年度に初等科に入学する3名が、この場に揃ったのだった。



5. ちゅわ!?!もしかしてワタクシ・・・既に!??

今までは背中だけで分からなかった。

確かに特徴は一致する。

カバンからタブレットを取り出して、画像と照合する。

赤みがかった黒髪が、一致する。紅い瞳が一致する。顔つきが一致する。

隣の少女も同じく。

桃色の長い髪、柔らかな表情。大きな瞳が一致する。

「……………待ち時間が退屈だったんですよ……………」

年齢にそぐわぬ気怠げな丁寧口調。

「せやからこんなにおっきな本買うてあげたんやんかー。」

メモの漬け物石になつとるのに気付かへんかったから、持ち上げてすぐ飛んでいってしもうて、ずっと迷子になつとつたんやよ。重かったわ……………」

気の抜けた炭酸のような、役のものとは異なる関西弁。

情報と一致する。

セイカ「そうか、彼女たちが『東北きりたん』と『琴葉茜』か」

セイカがなるほどとタブレットをしまうと、腰が抜けてケツを庇っているついなも反応した。

ついな「え?あの2人がか!

そんな…………ウチ、護るはずの相手に護られたんか……………」

セイカ「そうだな。勝手に暴走したことと言い、これは後でもう一度躰直す必要がありそうだ。」

ついな「お仕置きハリテヤマはもう堪忍やあああああああ  
あー!!!」

セイカ「そうか、彼女たちが『東北きりたん』と『琴葉茜』か」

東北きりたんは、セイカの僅かな気の緩み、口から零れた言の葉を聞き逃さなかった。

きりたん（私達のことを知っている？誰だこいつは？）

わざわざタブレットなんか開いて照合しやがった。敵か？）

わずか11歳とは思えない、或いは聞く者が聞けば中二病を疑うような思考をしたきりたんだが、ほんの一ヶ月前に堂々と悪の組織などと名乗るような者達を一網打尽にしていたのだから是非も無し。  
すると……

むにい。

きりたん「……………ふあんなひしてるふんでふかあ？あふかあかえ」  
茜が両手できりたんの両頬をむにいと引つ張った。

茜「アカンよ。きりちゃん。おつかないこと考えとる顔しとる……………」

少し悲しげな表情で、きりたんを見つめる茜。

きりたん「……………」

茜「あんなあ、きりちゃん。たしかにきりちゃんはあの日、ロケツト団と戦った。

ほんでも、きりちゃんは警察でも無いし【協会】の戦士でもないんですよ？

ウチ、心配や。ゆかりさんを追いかけて一緒に学園に行った時と、

おじいちゃんの研究所に帰ってからのきりちゃん、エライ顔つき変わってしもうたから。」

頬を引つ張る手を離し、今度は優しく包み込んだ。

茜「ウチはもう、ロケット団なんかと関わって欲しくないよ……」

きりたん「それは……向こうの出方次第でしょう。」

きりたんが年齢に見合ぬ鋭い視線を僅かにセイカに向ける。

茜「分かった。そんなに言うんなら！」

きりたん「は？」

茜「お二人さん、大丈夫やったか？ケガしとらんか？」

意を決したような顔をしたかと思えば、茜はセイカとついなのもとへ駆け寄っていった。

きりたん「は？いや……は??」

きりたん（何やってんだあのアホの子は）

茜「ウチは琴葉茜。この子は東北きりたんや。よろしくな」

セイカ（やはり……彼女達が……）

当初の予定の目立たずに交友を持つというのはもう無理だろう。

となれば、ここはやむを得ず次善の策として、彼女たちと友好的な関係を築いていくしかない）

ついな「ホンマにそうやったんかああああー!!!」

セイカ「え？」

茜「ふあっ？」

ついな「な、なんてことや!!ウチは守ってやるはずの子に守られてしもうたああああー!!!」

セイカ「お、おいえーいや、如月!?貴様何を言って」

ついな「こんなことではウチ、おじーちゃんに顔向け出来ん！いや、理不尽に押し付けられるであろうお仕置きが怖くて二度と家の敷居が跨げんくなる!!」

茜「お家、帰れへんの？」

ついな「せや!!このままでおつたらウチ、またおじーちゃんに『神トレーナーの修業じゃー!!!』とか言うて

ポケモンのタマゴ背負いながら『神トレーナー養成ギプス』を嵌められてシロガネ山ウサギ跳び登山10往復とか!!!

ギャラドス溢れる『いかりのみずうみ』を往復100周!!!

アサギシテイからタンバシテイをヨーギラス背負って濡れんようにストロー啜えて潜水30往復!!

リングマと素手喧嘩タイマンガチンコ勝負!!!

とか無茶苦茶やらされよるねん!!!」

茜「……………(絶句)!!」

きりたん(児童虐待)

ついな「普通の子やったら死ぬわ!!!!」

きりたん(何言ってるんだこいつ)!!!!

茜「大人でも死んでまうよ?」

ついな「せやろ!?それをおじーちゃんたと来たら『ウチにはレアスキル【ゲンシスキル】があるから、ちよつとくらい死んできた方が覚醒するんやー!!!』ぬかすんや!!!」

茜「……………そうなんかー」

ついな「それでも物には限度があるやろ!?!」

茜「せやねえ」

ついな「大人しいれでーのウチも仕舞いにはキレてな。おじーちゃんが昼寝し取る間に『神トレーナー養成ギプス』括り付けて、簀巻きにしてゴローニャと一緒にシロガネ山の山頂から叩き落としてドーン!!」

茜「ええ!?!」

きりたん(お仕置き増えそう)

ついな「そんなわけやから、どのみちウチは家には帰れへんねんけどな」

きりたん（いったい何の話してたんだ???)

ついな「これ以上家に帰れない負債を増やすわけにはイカンのや！  
・・・せめておじーちゃんの最期くらいは看取ってあげたいしな」

きりたん「ーーツツツ!???’」

《《ーー良いんですよ。ずんちゃん、きりちゃん。》》

絶対にここは譲りませんわ。可愛い、最愛の妹たちに看取って貰えるワタクシが、世界で1番幸せのお姉ちゃん……………。

これだけは神も悪魔も災害も壊おかせない純潔りようじきですわ!!!ちゅっ《《》》

鮮明にきりたんの脳裏に回帰した記憶の中の長女。

その見返りの表情は、妹に看取られた、世界で1番に幸せのお姉ちゃんのものであった。

きりたん「ハア……………」

ガリガリと頭を掻きむしるきりたん。

茜「きりちゃん?どないしたん?大丈夫か」

きりたん「そろそろ行きましよう、茜。どうせ学園に着いたら、弦巻先輩辺りが記念写真撮ろうとか言い出すんですから。

待ち合わせ場所にいないと、ウナも葵さんも探し回りかねないでしょう。

特にウナ。」

茜「せやったね。ウーちゃんジツとしとるの苦手やしなあ。

それじゃあ、ウチら、待ち合わせしとるからもう行くな〜」

ついな「ああ、そうなんか。分かったわ。と言つても、ウチらも同じタマムシ学園に行くわけやし、また会うやろうけどな!ほな、また

な！」

セイカ（…………結局、何一つ予定と合わないまま進行するの  
か…………ハア）

## 6. タمامシ学園入学式。

タمامシ学園初等科のポケモンバトル実戦所。

時は、少女達が記念写真を撮った後。

タمامシ学園初等科の入学式に移行する。

きりたん「仮にも学校の入学式が、何でこんな森の中で」

子どもらしからぬ警戒色の強い目で、きりたんは周囲を見渡す。

辺り一面、木。木。木。

地面は整備されており、しっかりと為らされた平面。そして、公式大会規定に乗っ取ったラインが引かれている。

そんな場所に立たされているのは、10〜13歳の少年少女。それも、世界中の地方から選りすぐりのトレーナー達。

この少女、東北きりたんもその一人。

紅い瞳が辺りを見渡す。

茜「森の中の入学式つてのも素敵やと思うけど、きりちゃんは嫌なん？」

すぐ隣に立つのは、桃色の長い髪を風に靡かせた少女、琴葉茜。

スズの塔の最上階に住み、世間から距離の置かれた生活をしている為、少々世間知らずの箱入り娘。

きりたん「別に、好きも嫌いも無いですけどね。こんな所でわざわざ入学式をやりたがるような変人に決定権がある学園つてのが、不穏な気がするだけですよ。」

ちらり。ときりたんは少し前の方に立っている、もう一つの不穏。

灰色の髪をドリル状にした少女に目をやった。

マチでカビゴンと戦っていた『ついな』と呼ばれた少女。

きりたん（正直に言えば、実力は殆ど素人に近い。

所持しているポニータは、高威力のワザを習得している。だからダメージの与え合いにはなった。

小柄なことが幸いして、そしてカビゴンの大ぶりの攻撃と言うこと

もあって回避も可能だった。だから、バトルの体裁を成していた。  
だが……)

きりたん「あの程度のカビゴンに全く勝ち目無しだったことを考えれば、大した敵じゃ無い」

そう結論付けると、思考を別の対象に移していく。もう特にこれと言ってしなければならぬ思考は無い。なら、イメージトレーニングを開始する。

師匠「結月ゆかりの教え。

『常に思考を止めず、何事が起ころうとも冷静に最善の対処をするべく、今自分が居る場所で起こりうる《身の危険》を想定し、その対処法を思考すること。』

落ち着いた状態から常に危機に対する対策を模索すること。』

きりたん（危機と対策を――想定し、幻想し、創造する……）

――

茜（きりちゃん……またゆかりお姉ちゃんに言われた修行に入っ  
たのかな）

一方、師を同じくする琴葉茜は、きりたんと同じトレーニングはしておらず、茜自身も不思議に思っているが、きりたんとは別メニューをこなしている。

茜「うくん……ウチもトレーニングしておきたいけど、入学式中には出来んなあ」

ポケットの中に入っているモンスターボールを指で撫でながら、自身の半身とも呼べる双子の妹、琴葉葵を見る。

葵「うう……何でよりによってこんな所で入学式やるのよ……」  
葵はノースリーブの服装で自身の腕を気にしながら虫除けスプレーを掛けている。

世を知らぬ姉と違い、今時の少女に相応しい感性と感覚で、森の中で肌を曝すことに抵抗感がある。



葵「お姉ちゃんも虫除けスプレー掛けてあげるね。」

茜「ありがとうなく葵ちゃん。」

姉を気遣い手持ちサイズの虫除けスプレーをかける妹の姿は、仲睦まじい姉妹そのものだ。

二人は12歳という年齢でありながら、茜が【ホウオウの巫女】に選定された時から、少なくとも時を離れ離れで過ごしている。

その時間を取り戻したいという気持ちはお互いに持ち合わせている。

葵「ウナちゃんも虫除けかける?」

姉に掛け終わった後に、葵は隣に立ったマツギヨ帽子を被った少女に声を掛けた。

スツと姿勢良く、自然に格好いい立ち姿で立っているのは、流石アイドルと言える。

ウナ「え?ああ、ありがとうな。でも大丈夫。ウナもちゃーんと使ってるよ!」

言いながら、ウナも自身の手持ちのスプレーを見せる。

葵「それゴールドスプレーじゃん!凄だねウナちゃん」

ウナ「偶然スポンサーの人から貰った。まだあるから、あおパイセンにもあげるな」

葵「ええ!いいの。嬉しいなーありがとうウナちゃん!」

ついな「ふわあく……………退屈や……………」

皆それぞれの手法で退屈な入学式が終わるのを待ち望んでいた。

そう。入学式の内容など、誰もロクに気にしていないのである。

ゆえに……………

「えーそれでは、初等科の皆さんの”もちもの”を先生が預かりに行きますので、手持ちポケモンと”もちもの”を全て預けて下さい。」

ついな「ふあつ?」

ウナ「ウナ？」

葵「何で？」

茜「??？」

きりたん「これは確かに危機の想定に違い無さそうですね……。」

「これより、タمامシ学園、初等科実力テスト『モンスターボール級』を始めます。」

7・嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅰ（音街ウナ  
琴葉葵 役ついな 登場） 後書きにきりたん  
の水着挿絵追加しました。意味は無い

タمامシ学園の校外【試験の森】

全く話を聞いていなかった少女達は、教師に荷物と手持ちを預けた後、エスパーパーポケモンのレポートによって、無茶苦茶暗い森の中に転移させられていた。

ウナ「うわあ…さっきの入学式やってた方の森と比較にならない位“森”してるウナ」

整備なんて微塵もされていない地面には、樹木の根っこが露出しており、もし仮にここで何かに襲われて逃げることになれば、足を引っかけ転ぶことになるのは間違いないだろう。

葵「うわあ…暗いしジメジメしてる…」

二人にはもちろん自分達が森のどの辺にいるのかも分からない。

何をすれば良いのかもロクに聞いていなかったからテストの内容すら不明。

積みである。

何より…

ウナ「まさか、葵パイセンと二人きりだなんて…」

葵「え？何で??私ウナちゃんに嫌われてたの!?!さっきゴールドスプレーくれたのは何だったの!?!お情けかな?」

ウナ「いや、ウナは葵パイセンのこと好きだよ?人間としては。

ただ、ウナ達のコンビって、前回も碌な活躍が無かったから、ものすつごく不吉だよね?」

出番的な意味で。と言うかいい加減に葵パイセンは茜パイセンと組ませろよ作者<sup>マスター!</sup>!!」

葵「何だか分からないけど、すごく無粋なことを叫んでる気がする!?!」

ウナ「なんて叫んでも仕方ないから、とりあえず歩いてみようか、パイセン」

葵「ええ!?それはやめた方が良いんじゃないかな」

ウナ「なんで?」

葵「だ、だって森の中だよ? 遭難した時はなるべく動き回らずに、安全な場所を確保するのが定石じゃないかな?」

ウナ「ウナ達は遭難してないよ? テストだよ。」

良い? パイセン。よく聞いて。読んで

ウナ達はこの森で何の試験をしているのか全く知らないんだよ。でも、もし森で何日かキャンプしなさいなんて内容だったら、タマムシ学園がポケモンの英才教育機関である以上、ポケモンを手放してやるのはおかしいよね?」

葵「それは…ポケモンに頼りすぎないようにとかじゃないの?」

ウナ「そんな精神的な成長を望むような内容を、入学してすぐの子も混ぜてやる試験でやるのはおかしいよ。」

なにより、アイドルの片手間で通ったとはいえ、ウナは初等科の1年間の授業でポケモンに頼りすぎた授業なんて受けたこと無いんだよ。

だから、ウナ達が受けているこの試験は

『入学したばかりの生徒と、既に授業を受けている生徒が不公平にならない』よう平等に受けられる何かになっているハズだと思う。」

葵「平等に…? 私達はみんな、一応はポケモンに関わる者達として『トレーナー』だったり『ブリーダー』だったり私みたいに『コーディネーター』だったり、結構バラバラな分野だけど、1年間以上の専門的な勉強をしているウナちゃん達と不公平にならない状況…?」

ウナ「うん。少なくとも、そんなに大きな差が生まれるような試験を入学初日に教育機関がやるメリットなんてないウナ。」

学費とかこれからいっぱい儲けなきゃ為らないのに、早々金づるを逃がすようなことなんてしない。」

葵「金づる…まあ、言葉はともかく、理には叶っている気がする。」

不思議なことに」

ウナ「そりやそうだよ。だってウナだって、ファンの課金で儲けを出すアイドルなんだから。」

ケツ毛一本までむしり取る為には、常にファンのみんなに『自分たちは大切にされている』って思わせなきゃならないんだよ。

このご時世、宗教の信仰対象になるくらいで無いと、商売なんて続かないんだな」

葵「わたし、年下の子からそんな生々しい話聞きたくなかったよ……」

ウナ「そんなわけだから、ニートみたいに引き籠もっても得は無いと見て、ウナ達は動きだそう！事情を知ってる他の子達に試験の内容を教えて貰えば、無事に動けるウナ。」

情報を収集したフラグを建てれば他の皆にも会えるかも知れないし。前期みたいに出番薄いの嫌だし（ボソツ）

葵「ねえウナちゃん本当は私のこと疫病神なんかだと思って無い!??（泣）」

ウナ「ソナナコトナイヨー」

こうして、ウナと葵の青髪コンビは、当てもなく他生徒を捜し回る探索パートに進むのだった。

――――  
【試験の森（西）】

ついな視点。

ついな「こちらついな。セイカはん。今試験会場に到着したのでー」  
役ついなは、試験開始と共に上司の京町セイカに連絡を取っている。

ちなみに荷物は預けてあるが、ボディチェックはされないの、スマホやポケットに入る程度の者は余裕で持ち込めるのである。

セイカ《ああ、こちらでも位置を確認している。どうやらお前の1番近くにいるのは『東北きりたん』のようだな》

ついな「うげっ!?!」

セイカ《うげっ??どうしたんだガマゲロゲのような声を出して》  
ついな「誰がガマゲロゲやねん!!せやかて工藤…」

セイカ《京町だが?レポートで記憶の一部を欠損したのか?》

ついな「……もうええわ。単純に苦手やねん。あの子。

助けてもろうてこんなこと言うんは失礼やと思うけど、あの『東北きりたん』つて子……昔会った霊媒師を思い出すから……」

セイカ《霊媒師?》

ついな「せや……まあ、昔の話やし、気にしても何もならんけどな。」

普段のバカそうな雰囲気からは想像も付かないような沈んだ声で話すついなに、セイカも僅かに冷や汗を垂らすが、すぐに切り替えていく。

セイカ《なら如月、改めて試験の内容を説明するぞ》

ついな「は!?!え、何!?!ウチも試験受けるんか!?!関係無いと思つとつたから何も聞いとらんかった」

セイカ《そんなことだろうと思つたが【教会】からも、勉強に関しては一切介入しないから自力で乗り越えるようにとのことだ》

ついな「嘘やろ!?!ウチ足し算と引き算までしか分らんのに!!」

セイカ《貴様それで良く大人のレディを自称したな。小学一年生じゃないか》

ついな「ウチは14歳や!!」

セイカ《ならそれに相応しい最低限の学力を付けろ

ああ、良い機会だから勉強し直すと良い。テストの点数次第では『罰』も辞さない》

ついな「ひいつ!?!」

バツと自身の尻を庇うついな。すでに本編と前書きで2発喰らっている【お仕置きハリテヤマ】の恐怖はしっかり身に染みているよう

だ。

セイカ《それでは試験内容を確認するぞ。

第一試験は

“森のどこかに隠されているモンスターボールの中にいるポケモンを手に入れること”

これは最低1体から6体まで手に入れることが許されているが、モンスターボールから解放した時点で入手したものと見なされ、手に入れたトレーナーの飼育下に置く。》

ついな「新たにポケモンを!?ウチの小遣いで出来るわけないやろ!? おこづかい月300円やぞ!?!『デイクソン』だけで精一杯や!!」

セイカ《なら、1体までなら必要経費として認めよう。

この試験で手に入れたポケモンを最終進化まで成長させることが中等科卒業資格の条件になる。》

ついな「な、なんてイケずな課題や……貧乏を殺しに来とるやないか!!」

セイカ《そうでもない。タマムシ学園に在学している生徒は殆どが中等科に進学するまでに何らかの資格を持ち【協会】の資金援助を得ている。

逆にそこまでいかない者は、自身に見切りを付けるか、退学処分であることが殆どだとも言えるがな。》

ついな「えげつない学園やな……」

セイカ《当然だろう。ここは義務教育ではない。才能ないものに与えられる権利もない。

お前に分からないわけがあるまい?》

ついな「……才能なければ死ねることやろ」

セイカ《この学園は命まで取りはしない。安心しろ》

ついな「……さよか。」

セイカ《さて、第二試験だが

“【試験の森】のどこかにある『レインボーバッチ』のハーフレプリカを手に入れること”  
だ。

これは私の予想だが、先の第一試験のポケモンを使用した何かを攻略の手順として用意されている可能性がある。》

ついな「どういうことやねん？」

セイカ《ポケモンの所持について、最低1体からという指定があったが、この試験で得たポケモン全てを最終進化させなければならぬ以上、ポケモンが多いのは卒業を視野に入れるとメリットとは言い難い。

よっぽど珍しいポケモンならともかく、欲しいのならテストの外で捕獲した方がデメリットが存在しない。それでも学園側は、ポケモンの所持数を1体と考えていない様子だった。

つまり、複数のポケモンを所持していなければクリア出来ない何か、初等科生徒に立ちほだかることになる予想出来る。》

ついな「それなら、他の誰かと協力すればええんちゃう？」

セイカ《ああ。そうだな。だがこの森は広い。偶然》に他の生徒に会える可能性はそう高くないかも知れない。というわけだ》

ついな「なるほどなあ。ほんでも【教会】はウチに【護衛対象】に仲良うして欲しいからサポートしてくれるつちゅーわけやな」

セイカ《ああ、そうだ。あくまでも試験の補助になるのは副産物。メインは彼女たちとの合流だ。それ以降は自分でなんとかしろ。》

ついな「分かったで！ほんならあんまり気分は乗らんけど、まずは『東北きりたん』のどこに行こうか」

セイカ《いや、今回はあえて『東北きりたん』ではなく、別のところだ》



ついな「お、そうなんか。正直それは助かるわあ。やっぱり苦手な  
んは苦手やし……。」

ほんじゃ、茜ちゃんのところに案内よろしく頼むでーセイカはん」

8. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験Ⅱ（音街ウナ  
琴葉葵 役 ついな 登場）

【試験の森】 某所

〔琴葉葵・音街ウナ〕 視点

入学式で微塵たりとも説明を聞いていなかった二人は、自分体以外の参加者に試験の内容を確認する為に森の中を歩いていた。

小さな子どもが歩くには整備が全くされていない、発生しそのままの森を特に苦も無く歩く二人。

ウナ「これは夢か？葵パイセンが2話連続で出演しているだど!？」

葵「ねえウナちゃん。私泣くよ？いい加減泣いちゃうよ!？」

妹は意地悪されると挫けちゃうんだよ!？」

ウナ「葵パイセンは、殺されかけてもキモいロン毛のおじさんに啖呵切った妹きりちゃんを見習うべきウナ。」

葵「……私、あの子嫌い……」

ウナ「ふーん。」

特に気にした風でもない感じで言いながら、ウナは先に進む。

ウナ「ところで、葵パイセンって、意外に体力あるのなー」

葵「え？どうしたの急に……」

ウナ「いや、森の中の散歩って大人でもキツイもんだからさ。」

ウナはアイドルって言う見た目よりずっと体力勝負な仕事してるから、時々体力トレーニングのために森に来てて慣れてる。

葵パイセンは全然疲れた様子も無くウナに着いてきてるじゃん?」

前に行くウナは、慣れた手つきで木々の枝を手折り、危ない足場を踏みならして歩いている。

今現在も坂を上がっている最中だが、後続く葵は、周囲の警戒をしながら誰か近くに居ないものかと見渡している。

背が低い洞察力があるウナと、背が高いが敢えて植物の多いところを避けていた葵。

お互いが補い合い、役割をこなす。

葵「そう言えば言ったこと無かったつけ。私は『ポケモンコーディネーター』なんだよ。」

ウナちゃんが人間の魅力を魅せるなら、私達はポケモンの魅力を魅せるの。」

ウナ「ああ、だから葵パイセンはバトル慣れしてなかったのなー」  
葵「バトル慣れしていないかな？コーディネーターもコンテストバトルはするんだけど……」

ウナ「それは『魅せプレイ』同士の魅せ合いでしょ？

お互いに“相手を倒すこと”が1番の目的じゃない。決まった場所、用意ドンで始まるから、心の準備も出来るし、対策だって立てられる。」

それって『試合』であつても『バトル』じゃないよね？」

葵「……………だから、私が弱いつて言いたいの？」

ウナ「『試合』に勝てるからって『バトル』で勝てるわけじゃないから、気を付けてねってことウナ。」

もしまた、ロケット団とかが襲つてきて、一人きりだったら葵パイセンは戦わない方が良くよ。」

葵「あ、あの時は、マキ先輩とのバトルで【トリトディア】がいなかったからだよ！

あの子と一緒にいたらもつと活躍してたよ!!」

ウナ「ウナもあの時【しらすどん】がいなくて全然戦えなかったけど、それって言い訳にはならないんじゃないかな……例えば茜パイセンは変な鳴き声の『メタモン』と一緒にジャキラってヤツと戦ってたよね？」

葵「そうだね。色んなポケモンに『へんしん』したりして『エルレイド』と戦ってた。」

アレだって『ひんし状態』でも無理矢理戦わせる『ダークポケモン』ってヤツじゃ無かったらお姉ちゃんの勝ちだったよ。」

ウナ「でも、結局は茜パイセンの『メタモン』は倒れた。」

葵「相手が卑怯だったただだよ」

ウナ「アレは卑怯とかって生やさしいものじゃないけどな。」

まあ、問題はそんなことじゃないウナ。茜パイセンはその後も『エンテイ』とか『ライコウ』とか戦えるポケモンがいたし、きりちゃんとの連携もあつて、結果的にジャキラを倒したけど。

今はそれが出来ないよね？だって、きりちゃんの「はがねまる」は、あの後無理が祟って『ポケモンセンター』で療養中。茜パイセンの伝説3体は今、休暇中で傍を離れてるんでしょ？

もし、それがあの戦いの前だったら、マキパイセンも、ささらちゃんも足止めされてて、ウナ達みんな殺されてたかもしれないわけだし。」

まあ、ウナが焚き付けといて何言ってるんだコイツって感じだと思うけど…と続けて。

ウナ「“言い訳したって、殺されたら死ぬから意味ない”よね？つてこと」

葵「それは…だって…っ」

何か言いたいのは負けず嫌いゆえか。認めたくないからなのか。どのみち言の葉を紡ぐことが出来ず、葵は俯くだけだった。

悔しいのか、情け無いのか？本人にも分からない感情の泥が心の奥底で蠢く。

葵「わ…私は…」

ウナ「と、言うわけで！ウナ達は手持ちポケモンを増やして鍛えていく必要があると思うウナ!!」

葵「…え?? (；。ロ。)」

ウナ「ウナと葵パイセンの弱点は同じ！戦力が少ない!!切り札一極化!!」

そんな初代ポケモンを始めたばかりのマスター達みたいな博士から貰ったポケモンだけ育ててたら相性悪いジムリーダーで詰んだ

みたいな状況をいつまでも放置して置くわけにはいかない!!」

葵「ねえ、まってウナちゃん。今そんな話してたの!?! 脈絡なさ過ぎない?!」

ウナ「だってウナにはシリアスな雰囲気合わないだもん。」

葵「それにしたってそんなえげつない方向修正あるかな!?!」

ウナ「まあ、足下にこんなあったら報告したくなるよね。」

葵「え?」

言いながら、ウナは足下の何かを器用に足で蹴り上げてキャッチして見せる。

葵「それ、モンスターボールじゃん!

先生に預けたはずなのに何で!?!」

ウナ「実はさつきから稀に良く見つけてて:」

手には更に二つのモンスターボール。合計三つ。

葵「どうして:?:」

ウナ「2度あつた偶然が、3度目なら必然。」

意図的に学園が撒いたって考えるのが自然だと思ふな。

もう30分は歩きっぱなのに、ポケモンは出て来ない。なのにモンスターボールはもう三つ。

これってモンスターボールは試験に使うってことじゃないかな?」

葵「ポケモンがないのに、モンスターボールを使う:?:」

的当てでもするのかな?」

ウナ「くっその外れな」

葵「何でよ!?!」

ウナ「ほら、よく見てよ。ボールの中。もうポケモンが入ってるよ。」

モゾモゾと何かが動いている。

葵「そうなんだ。じゃあ、中身を見てみようよ。」

ウナ「そうだね。それじゃあ:~:」

ウナがボールの開閉スイッチに指を――

ついな「うつつつぎやあああああああああ———」  
助けてええええええええええ———!!!  
!!!!??

ウナ・葵「え??」

とても少女の声帯が出して良いものとは思えない絶叫を吼えながら逃げ惑う如月ついなの方を見ると……

ついな「ちよ!!そこのお嬢ちゃん達!!早う逃げるんや!!死ぬで!!!」

「ポツチャマアアアアアアアアアアアアアアアア———!!!」

超莫迦デカいポツチャマに追いかけて回されていた。



観察に集中することにしたのだった。

《どこが心配無用じゃあああああああああ———!???》

セイカ（口に出していただろうか）

—————

ウナ「うああああ———!!! 葵。パイセンにスポットが当たってると思ったらこんな役割か———!!」

葵「ウナちゃんさつきから私に対して酷すぎない!？」

ウナ「こんなことに巻き込まれるなら、ウナは青い子になりたくなかったウナー———!!」

葵「辛辣だああああ———!!!」

ウナ「ところで、その小さい子はどちらさん?」

ついな「小さい!?! ウチは中学……って———あああああああ———  
!!!?」

何かを言おうとしたついなに、ポツチャマの“あわ”攻撃が襲う!

ついな「ガボガボガボ!?!?」

ウナ「うわあ!?! 小さい子があわに巻き込まれた!?!」

葵「これ私達もマズいよね!?!」

吼えるポツチャマが遠慮無しに超巨大な“あわ”と“たいあたり”で襲ってくる。サイズだけならキョダイワザとさほど変わらない。そして手持ちがない彼女たちにしてみれば、生身でゴジラに襲われているようなもの。

ワザがシヨボい事だけが救いと言える。

ウナ（どつちみちこんな走りづらい森の中で、追われて逃げてても



体力が持たない。

どこか・・・隠れられるところを探しながら逃げないと。

・・・・・・ついでに、あのポツチャマを運んできた元凶も、仕方なく回収して上げなきゃ・・・（）

走りながら横目で様子を見ると、べっちやべちやになって目を回しているついな。

葵「なんで・・・ゼエ・・・あんな大きな・・・ハア・・・ポツチャマが!？」

ウナ（葵パイセンは限界が近そうだな）

ウナは走りながら二人の様子を確認すると、今度は周囲の木々を観察して忍者のような身軽さで登り始め、キョダイポツチャマの頭頂部が見えるほど高い位置まで登ると、道中で拾っていた3つのモンスターボールを取り出す。

葵「ハア・・・ハア・・・つつ!!」

そうしている間にも、キョダイポツチャマは葵を追いかけている。

一体何が目的なのか？吼える。アワを吐く。つつく。

一発でも喰らえば大怪我では済まない。

既に喰らっているついなは目を回しているだけだが、それは彼女が特殊な訓練を受けているだけに過ぎない。葵が喰らえば命が危ない!!

ウナ「・・・・・・よし、決めた。」

意を決したウナは、1つのボールのスイッチを押して・・・

ウナ「頼むぞ、なんか知らないポケモン!!この状況を納めてくれ

!!——あわよくばドラゴンがいい」  
中身不明のボールを投げ込んだ。

森の中。

Side：琴葉茜

茜「ぽわ〜」

葵たちがキョダイポツチャマに追いかけ回されている時、琴葉茜はほわほわと森の中を歩いていった。

茜「ここが『森』なんやね〜。スズの塔から見える範囲からは、森の中までは見えへんからなあ。

おつきな木。少しだけ暗い場所。ワクワクやね。

ね？エビフライ」

エビフライ「ヤデー」

何故か茜の隣には『ヨーテリー』に『へんしん』している茜の手持ちである『メタモン』の「エビフライ」が居た。

茜「とつさに髪飾りにへんしんしてて貰って良かったわ〜。

『何が起こるか分からんからポケモンとは常に離れんように』ってゆかりお姉ちゃんに言われとったから、どうしようかと思っただけ。上手くいったな〜」

エビフライ「セヤナー（もごもご）」

隣を歩いていたエビフライは、いつの間にか何かを啜えて着いてきていた。

茜「あれ？何持ってきたとるんや？エビフライ」

エビフライ「エビフライー」

茜「えらいまああるいエビフライやな〜」

エビフライ「ハイー」

エビフライから差し出されたまあるいものは『ラブラブボール』だった。

茜「これ『ラブラブボール』かあ。二年前と言い、ウチらは本当にこのボールに縁があるんやな」

エビフライ「セヤナー」

茜「けど、なんでこのボールがここにあるんやろか？」

ガンテツじーちゃんが以外に『ラブラブボール』を作れるボール職人なんて、そうそうおらんハズやけど……」

考えながら、森の中で歩を進め始める。

茜「そういえば、試験で送られたハズの場所やったなくポケモンのゲットが試験なんかな？」

エビフライ「ハイー」

そうしている間に、またエビフライが何かを拾ってきた。

茜「ありがとう。今度のは……草タイプのわざレコードやな。」

中身は……うん。分かるな。ゆかりさんに言われた通り『わざレコード』の中身が分かるように勉強しといて良かったわ。

これはあん時とは違う所やな。」

エビフライ「ハイー」

茜「ありがとう。今度は『プラスパワー』か。」

『ボール』に、『わざレコード』。

ここまで矢続きにトレーナーズアイテムがぎょうさんあるってことは……」

エビフライ「セヤナー」

茜「せやな。この試験はきつと『ポケモンのゲット』とポケモンとのバトル……」

ううん。

多分『レイドバトル』のような強力なポケモンをこの森の中でゲットしたポケモンと戦うんやね。

一緒に何人かの仲間達と協力して戦うような強力なポケモンとの戦い。」

その時、どこからか声が反響した。

茜「そうになると、ウチも試験のレギュレーションに合ったポケモンを探さんとなあ」

手に持ったラブラブボールに視線を向けるーいや、すぐに外した。

茜「パートナーもおらんでゲットしなさいは無いな。

森のあっちこっちに有るはずや。人間に懐くように育てられたレベルは低いポケモンが。

多分、一体だけじゃ勝てへんようなレベル差やろうな。

そうでなきや『わざレコード』や『プラスパワー』が落ちとる意味が無いやろうし……。

……それじゃあ、この『ラブラブボール』は何の為に？」



その日、森の木々で上手く身を隠していた葵は思い出した。  
自身が持っていた幸福と平和を……。

既に持っていた権利を奪われる屈辱を……。  
本来捕まえて、使役する側であるはずのトレーナーが、ポケモンに脅かされる危険性は、中途半端にトレーナーとして活動する者ほど忘れてしまう。

そんな、キョダイポツチャマに追われている葵は、嫌でも思い出すのだ。

自身がポケモンの力無しでは何の力も無い子どもに過ぎないという事実を。

次第に走る力を奪われて足の動きが鈍り始める。

そしてじきに足が止まり、遂には葵の命の鼓動も止まるのだろう。

葵「ヒイツ?! い……嫌だ……。助けて……。お姉ちゃん……っ!」

ポツチャマの暴威に曝された葵に、今まさにキョダイポツチャマの『アワ』が放たれようとして……。

葵「ハア……ハア……。っ!!」

「頼むぞ、なんか知らないポケモン!! この状況を納めてくれ!! ーあわよくばドラゴンがいい」

モンスターボールがポツチャマの頭部付近に投げ込まれ、中のポケモンが解放され、キョダイポツチャマの頭頂部に衝撃が入る。

「ポチャアツツ!」

ダメージはそこまででも無いのか、頭をさする様子を見せるキョダイポツチャマは、自分に攻撃してきた何かを探してあちこちをキョロキョロしている。

葵「え? 何?? 誰かのポケモンなの??」

ポツチャマの意識から離れた葵が呆然としてみると、足早に近づいてきた音街ウナが葵の手を引きポツチャマから離れていく。

ウナ「さあ、逃げるぞ葵。ハイセン!!」

葵「ウナちゃん!」

葵の手を引きながら、音街ウナは周囲を把握する。

葵は救出した。

しかし白髪の少女は未だに地に伏したままだが、息があるのは遠目でも明らかだろう。

ついな「きゅ〜」

なんだかマンガみたいに目がうずまきになっているように見えなくも無い。

そして、今自分たちが逃げられる状況を作ってくれているポケモン。

森の木々を飛び移り、キョダイポツチャマのワザを回避しながら死角を見付けて……

「……!!」

「ポチャッ！」

近づいて撃つ。

このまま倒すことは難しいだろう。だが、時間を稼ぐには持つて来  
いだ。

ウナ「すごいぞ、アイツ。何にも指示してないのにトレーナーが指  
示してる時みたいな動きをしてる」

ポケモンの姿が見えていても、あのミドリのポケモンが何ていう名  
前なのか、音街ウナには分からないが、ただ、トレーナーを必要とし  
ない戦い方は、あの紫の先輩のスタイルを思い出させる。

ウナ（あのポケモン、さつきから強いワザを使ってない。

あのポケモンは力量レベルが低い？でも、状況判断を自分でして戦つて  
る。

つまり、あのポケモンは、誰かが意図的にレベルを上げないように  
鍛えられてる？）

手元には残り二つのモンスターボール。

ウナ「……。」

葵「ウ……ウナちゃん……??」

葵を見るウナ。

ウナ「……。」

ついな「きゅ〜」

ついなを見るウナ。

ウナ「………ヨシ！」





どこぞの駄女神のような泣き顔で叫ぶと、葵は全力で走り出したのだった。

ウナ「……………葵。パイセンにスポット当てようとした結果、もうこんな役回りしか残ってなかったんかな。

おっと、それより今はこっちの子だな。

おーい、大丈夫かー？」

ついな「うーん……………もう食べられんよー」

ウナ「可哀想に、葵。パイセン。こんなありきたりなギャグの為にキョダイなポツチャマにエサにされそうになってるのなー。H A H A H A」

なにわろてんねん。葵が聞いていたらブチ切れそうな反応をしているウナ。

しかし、彼女の両手はついなのスカートに向かっていた。

すると……………

??? 「キヤモ。」

上から、緑色のポケモンがウナの隣に降りてきた。

ウナ「あ……………」

黄色の瞳。

黄緑の身体。二足歩行のは虫類。口元には植物の枝が啜えられている。ポケモン。

ウナ「ウナ達を助けてくれたのは、おまえなんだな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ウナの言葉に、ただ瞳を閉じて首肯する。

ウナ「そつか。ありがとうな。ウナ、おまえが何ていう名前のポケモンなのか知らないんだ。何て呼ぼうか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ウナの言葉に反応したミドリのポケモンは尻尾に持っていた『にがおえメール』を手渡した。

“SR 『キモリ』 草タイプ

Lv 6 使えるワザ

はたく

にらみつける

このは

でんこうせっか

育成者コメント『すばやさを活かす戦い方を仕込みました。』

無口ですが、生来の個性のようです。共にキズナを育んだ分だけ、必ず力を発揮します。

頭のよい子です。ーー』

“

ウナ「この子を理解して上げて下さい。きつとこの子もそうします。」

・・・・・・・・・・・・・・・・育成者ーー結月ゆかり。」

キモリ「・・・・・・・・・・・・・・・・キャモ。」

ゆかりの名前に、僅かな反応を示すと、ミドリのポケモンーキモリは懐かしい想い出に浸るように微笑んだ。

ウナ「・・・・・・・・・・・・・・・・キモリ。」

キモリ「・・・・・・・・キヤモ。」

ウナ「・・・・・・・・よし、お前の名前は『くろやき』だ。

ウナは自分のポケモンにいつも連想出来る食べ物の名前を付けるんだ。

食べられなくなったら頑張るんだぞ！」

キモリ「キヤ・・・キヤモ；」

お・・・おう。と言わんばかりの反応を返した。キモリの「くろやき」は『ま、いつか』と前向きに捉え受け入れた。

ウナ「ウナの名前は、音街ウナだ。

ジュニアアイドルをしてる。他の子達に負けないように頑張ってるウナ。

よろしくな！くろやき。」

くろやき「キヤモ！」

少し変わった感性のトレーナーだが、悪くない。

それがくろやきからウナへの第一印象だった。

ウナ「よし、それじゃあさっそくだ！くろやき」

くろやき「キヤモ。」

ウナの掛け声に合わせて、目の前で暴れるキョダイなポツチャマに向き直る。

このポケモンをどうにかする。先ずはそれを遂行しよう。

くろやきは腰を溜めてポツチャマに向かうように構えた。

ウナ「ウナがこの子の<sup>っいな</sup>パンツ脱がすから、くろやきは、生尻にガチビンタして、この子をたたき起こしてくれ。」

くろやき」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
「キャモ？」

ウナ「自分で起こした不始末は自分でケツ拭かせるとして、まずは“ケジメ”を付けないとな。

「つてうわ、なんかこの子の尻真つ赤だな。ここにポケモンのワザを叩き込んだら痛いじゃ済まないだろうな」“ケジメ”付けるには丁度良い場所なんだけどな」

「ついななの“おしおきハリテヤマ”を喰らった尻を見て、少し考える素振りをしていた。

一方、命じられたくろやきは

くろやき（アイドル：“ケジメ”とやらは、ヤクザの領分だった気がしないでもない。）

なつたばかりの主人の方針に、早くも疑問を感じなくもないくろやきだったが・・・・・・・・・・・・・・・・

ウナ・くろやき（ま、良いか。）

こうして、何だかんだ細かいことを気にしないトレーナーとポケモンによって、ついななの尻は再びやられるのだった。



ついな「」

その叩き付けるは、幸か不幸か会心の出来であり、確実に急所を捉え、最大値のダメージを叩き出すものだった。

痛覚を無駄なく刺激し、皮膚を焼き擦る。

これをキョダイポツチャマに向けて使えていたのなら、倒しきれないまでも、追い詰めることは出来たかも知れない。それほど威力が全て

ついな の尻に注がれた。

い

な

痛みと苦痛。衝撃と焦燥。光よりも速く闇よりも深い電気信号が!?????????つ  
ついな の全身を駆け巡り、その正体にカラダとココロが気付いてしまったその時、少女の口からは、音に為らない咆哮がゼンリヨクで放たれたのだった。

ついな「」

ウナ「おおくなんか声にならない悲鳴みたいなのが来て来た気がするな」

くろやき「……キヤ、キヤモ。」

ついな「」

ウナ「おーい、目が覚めたかな?」

ついな「……」

ウナ「……返事が無いなあ……」

ついな「……」

ウナ「おーい。」

ついな「……」

ウナ「……」

ついな「……」







ついな「そのくらいお安いご用や！それじゃあ行くで、ウナはん!!」  
ウナ「よっしゃあ!!」

ついなは手渡されたボールを投げるモーションに入り、ウナの傍に居るくろやきはスタンバイが出来ている。

ウナ「いつけえくろやき!!」

ついな「頼んだで！ウチの新しいポケモン!!」

二人のトレーナーの意思で、くろやきは葵を啄ついはもうとしているポツチヤマの元に飛び込み、ついなが放ったボールからポケモンが解放される！

くろやき「……………キャモ。」

「ニャー!」

ついなのボールから出て来たのは、額にコバンを付けた二足歩行。ばけねこポケモン。

ニャースだった。

投げたボールを手元に戻したついなの手元には、ガシヤポンのカプセルで出て来るような説明書にがおえメールが同時に舞い降りる。

ついな「おお！ニャースか!!」

ええやん。この子ならエサ代も大きくならんし、これでセイカはんからお尻を護らんで済むで!!」

ウナ(この世界はそんなについなちゃんに甘くない。それを後についなちゃんは思い知るのであった。)

ついな「あれ？なんやろ、背筋とお尻に嫌な汗が……………」

ウナ「ついなちゃん、このニャース何が出来るって書いてあるかな？」

ついな「え？あ、ああ……………えつと。」

“ UC 『ニャース』 ノーマルタイプ

Lv 12 使えるワザ

なきごえ

ねこだまし

フエイント

ひっかく

ネコにこぼん

育成者コメント『初心者用ポケモンとして育成するように言われましたが、うっかり育てすぎちゃいました。

よく攻撃をきゆうしよに当てられます。

がんばってね!』

育成者ー弦巻マキ

ついな「だそうや!」

ウナ「当てられます………。葵パイセンには見せないでおこうか。

それよりも、ついなちゃんのニヤースはウナのくろやきよりレベル高いんだね。

じゃあニヤースにメインアタッカーをやってもらっていい?」

ついな「くろやき」てアンタ。

……ま、まあええわ!それじゃあ、ニヤース『ネコにこぼん』や!」

ニヤース「にやー!!」

キョダイポツチャマに走り寄りながら右手を小判にかざすニヤースと、更にはついなまでもがポツチャマに詰め寄った。

ウナ「おいおいおい………。」

ウナ（死んだわ、アイツ。）  
半笑いで突っ込んで行くついなを見送ると、ウナはくろやきに指示を飛ばす。

ウナ「くろやき！ついなちゃん達がタンクしてくれてる内に、こっちは安全な場所から『このは』でダメージ入れていつてくれ！ウナは葵パイセンを拾ってくるから」

くろやき「……………キャモ！」

こうして、

キョダイポツチャマのヘイトをついなが稼いで襲われ

ニヤースは小判からオーラ状の力を右手に溜めて、相手に向けて振り抜き『ネコにこばん』を放ち

先ほどと同じ要領で隠れながらじっくり狙い撃って『このは』を急所に当てていく

という即席のコンビネーションで意識を葵から完全に切り離れた。

ウナ「で、ウナが戻ったってわけ。」

葵「実はウナちゃんが一番人としてアレなんじゃないかろうか。ボクは訝しんだ」

ウナ「なんで説明口調なんだ？葵パイセン」

葵「ううん。もういいの。気にしないで。ボクはもう出来ないことを無理矢理するのは諦めたよ。ところで、今ならもうボクたち三人で逃げられるんじゃないかな？」

逃げないのかな？逃げようよ。ボクもう逃げたいな……………」  
ポツチャマのつつくから命辛々逃げていた葵は頭を擦っていたらしく、一部禿げ上がっている。

それを気付いているのかいないのか、目からハイライトが消えた表情で膝を抱え、悲壮感が全身から漂う。

ウナ「……………なあ葵パイセン。（ウナが上げた）」

モンスターボールは？」

葵「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（無言でモンスターボールを差し出す。）」

ウナ「うん？（受け取ってボールの開閉スイッチを押す）」

パカツ（↑ボールが開く音）。

ハズレ。

無情にその一言だけ書かれている紙が出て来ただけだった。

葵「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ボク、こんなのばかり」

ウナ「・・・・・・・・・・・・・・・・ドンマイ。」

ポンと肩を叩いて、手持ちのゴールドスプレーを優しく吹きかけて上げるのだった・・・・・・・・。。。

12. 嵐の前の静けさ【試験の森】の試験VI（音街

ウナ 如月ついな 琴葉葵 琴葉茜 新キヤラ）

挿絵・可愛く描けた茜ちゃん・有り

あらすじ

葵「ウナちゃんがくれたこのボール空なんだけど!？」

ウナ「あらほんと」

ポクポクポク……チーン。

ウナ「じゃあ、もうそれであのポツチャマ捕まえようぜ?」

葵「え……嘘でしょう? 入るわけ無いよね?? あの巨体だよ?? バカなの?」

逃げるしか勝たないでしょ? ポクたち拾ったポケモンしかないんだよ? 勝てるわけ無いよね。ね?」

負け犬根性全開で保身に走る葵にため息一つ付いたウナは、少し深めに息を吸って……

ウナ「ボロ雑巾みたいにズタボロにされたけどでも生きてるし、隙が出来たから逃げ帰ろう。

身体は傷だらけだし泥だらけだしポツチャマにはエサにされかけたけど、でも命はあるし。もう良いでしょう。『許して上げましょう』とかって言葉だけ上から目線で言っただけな鼻糞程度の自尊心だけ護って逃げましょう。ポケモン愛護団体だって黙ってないだろうから逃げましょう。

痛いのは嫌だし。どうせ勝てないから逃げるが勝ちという負け犬の遠吠えで我慢しよう。

だって死ぬのは怖いし。

人としてのプライドなんて勝てるかも知れない程度の可能性に賭



ペロツパフ「ぱふっ」  
フォッコ「キュウン」

足下にはこの森で手に入れたフォッコとペロツパフ。

そして、正面にはふたりの人影

「それはそうだろうね。それは第二課題で持ってくることになっている『ハーフレプリカ』だ。」

その半分この状態で正しい形なんだよ、アカネ」

「そりやそうだー。第二課題で『レインボーバッチ』のハーフレプリカって言ってたもん。」

そのまま正しいんだよ。

それにしても本当に話聞いてなかったんだなーアカネ。」

茜「うん。友達とも会えへんし、どうしようかなーって困ってたからな。」

ホンマ、ヒメちゃんとミコトちゃんに会えてよかったわー」

髪先が青く、全体がピンク色の長い髪のパワフルな印象を思わせる少女、鳴花ヒメ。

髪先がピンク、全体が青い短髪の育ちの良さを感じさせる気品を持つ少女、鳴花ミコト。

ヒメ「姫も良かったゾ！同じ髪で！双子で！お姉ちゃん！面倒臭い重責。」

姫と同じ！

これはもうアカネも双子と言っても過言では無いのでは!？」

ミコト「それだと三つ子です、姫。ああ、いえ。茜も双子なのですから、四つ子になるのでしょうか」

茜「ええなあ〜それやと、どっちがお姉ちゃんでどっちが妹やろうか〜?。」

ヒメ「もちろん姫がいちばんお姉ちゃんだ！姫だからな！」

茜「おお御ヒメ様や〜」



ヒメ「そうだぞ！お姫様だ！美味しい物食べ放題だ！」  
茜「ええなあ。素敵に暮らしてー」

ミコト「……現実はお稽古や習い事や王族のしきたりなんかで自由が無いよ、アカネ。」

ヒメ「こらミコト！嫌な現実突きつけないの！」

茜「現実はどこもやるせないなあ……」

ミコト「すみません、姫。」

仕方ないと気持ちを切り替えた茜は、持っていた二つのハーフレプリカを二人に手渡した。

ヒメ「なあ、アカネ。やっぱり姫達も妹と友達探すの手伝うぞ？」  
ミコト「そうですね、姫。」

アカネ、僕達も手伝うよ。もう三人とも『ハーフレプリカ』を手に入れてから、後はその『帰還専用レポート床』に乗れば良いだけだからね。」

茜「ありがとうございます。二人とも。  
けど、御ヒメ様は試験を一番にクリアするー言うてはりきつとつたやないの。」

ウチがそれをお邪魔するわけにはいかんよ。」

遠慮がちに言う茜にドヤ顔仁王立ちで笑うヒメ。

ヒメ「ふっふっふっ……！」

認識が甘いぞ。視野が狭いぞおっばいが小さいぞアカネ！」

茜「え？認識？おっばい？」

きよとんとしつつも服の上から自分の小ぶりなおっばいを確かめる茜。

ミコト「アカネ、姫の話は半分くらいは意味の無い言語で構成されているから気にしないで。」

ヒメ「なんだとミコト！パンツ剥ぎ取ってオークションにかけるぞ」

ミコト「お父様にお叱りを受けますよ。姫。

それに、最初の試験は一番で通過して、ガラル王族の力を示すようにとお父様からも言いつけられております。」

落ち着いた表情をしながら、スカートはしっかりと守るミコト。

ヒメ「愚かな男の見栄だ。捨て置けミコト。

国民の生活と気持ち、平和を尊ぶのが王の……人の代表たる者の責務だ。

そして、一番なんか、とりたいたきにとれる。そういうものじゃ無ければ、なったところで次の一番が出て来るだけだ。一番なんて、運命に選ばれたヤツが望みもしなくてもなっているものなんだ。

そんな刹那的な称号のために、助きたい友達を見捨てなきやならない。

そんなやつが、いつまでも一番でいられるものか。」

ミコト「……ヒメ。」

ヒメ「だからアカネ。ヒメに頼れよ。ミコトに頼れよ。

さつき試験を突破したのは、アカネが助けてくれたからなんだぞ。

次はヒメの番。順番だ！」

茜「……ヒメちゃん。ありがとう。」

ヒメ「おう！じゃあミコト。姫はアカネと一緒に行くから、ミコトは「ハーフレプリカ」を持って試験突破な」

ミコト「……え？何故ですか??？」

さつきと話が違うじゃねえかという顔をしながら問うミコト。

ヒメ「だってアカネの話によると、妹のアオイ。友達のキリタンにウナだろ？」

ミコト「はい。」

ヒメ「そこにアカネと姫とミコトが入ったら六人だろ？」





茜「でっかいポケモンやねえ・・・ビツクリや。」

ウナ「せつかくだから捕獲したい野心を剥き出しに、葵パイセンとついなちゃんを焚き付けたところ、もう一息足りません。ボールは葵パイセンに上げてるので手伝ってほしいウナ。」

茜「そうやねえ・・・」

茜（見たところ、やつぱりダークポケモンのオーラは無いな。

さつきヒメちゃんに説明されてへんかったら混乱しとったやろうな・・・）

ヒメ「ならば丁度良いぞアカネ！さつきミコトから借りた物を使うときだ！

使用時間は3分間！教えたとおりにやってみろ!!」

茜「そうやね。ウチやってみるわ。」

ウナ「うん？やってみるって何を？」

茜・ヒメ「ダイヤモンドスタイルムや（だ）」

ヒメ「まずはポケモンをモンスターボールに戻す！」

茜「戻っておいでくわたあめ。」

近くで遊んでいた手持ちのペロップをラブラブボールに戻す茜。そして、桃色のバンドを腕に巻いた。

ウナ「リストバンド？Zリングじゃなくて??」

茜「Zリングはちよつとゴツイから、こつそり持つてこれんかったんよ。」

ヒメ「お前が音街ウナだな！せつかくだから一緒に覚えよう！手間は一纏めだ

ボールにギューつとチャージして、でっかくなったボールを投げろ！

Let'sダイヤモンドスタイルム!!分かったか!？」

ウナ「なるほど分らん。」

茜「えっと、こうやって……」

ウナ「リストバンドとボールが光った」

ヒメ「これがガラル地方名物！『ガラル粒子』をボールにチャージするスーパーアイテム。

『ダイヤモンド』だ！」

茜「おお！でっかくなった！ちよつと重い……」

ウナ「こんだけデカかったら、あのポツチャマも捕獲も楽に出来るのでは!?!」

ヒメ「よーし、アカネ！ぶん投げろおおー!!!」

茜「えーりやあああああー!!!」

超巨大なダイヤモンドボールを、茜はなんとか両手で下投げする。すると、ボールは更に一回り大きくなり、ポケモンが解放される。

「ペロッパー！」

ヒメ「ヨシ、成功だ！」

茜「わたあめが」

ウナ「でっかくなったあああー!!!」

1?.. 5 ずん子のデレ期 【微ゆかずん】（結月ゆかり、東北ずん子 弦巻マキ 登場）

タمامシ学園 高等科 家庭科室

ここに、三人の美少女がいる。

緑色の長髪の東北ずん子。

紫髪の短髪の結月ゆかり。

金髪で巨乳の弦巻マキ。

ずん子「……………」

ゆかり「……………」

マキ「……………」

ずん子には怒りの表情が浮かんでいる。

怒りの矛先は、結月ゆかり。

少し前に血飛沫が飛ぶほどのバトルをした相手だ。

割と癩癩持ちなどところがあるずん子は、大切なことを口にしないタイプのゆかりと衝突する事が多く、二人と友人同士である弦巻マキは、いつも二人の仲裁にまわる立場だ。

が、マキの苦笑が浮かぶ顔を見る限り、今回ばかりは毛色が違いうらしい……。

ずん子「……………」ゆかり。これは何ですか？」

ゆかり「……………」

普段ずん子になにを言われても飄々としているゆかりだが、今回は決してずん子の目を見ようとせず、顔には冷や汗。

姿勢は正座。手はお膝。完全なる反省スタイルである。

クーガ「マキ、窓ガラスは今日中に付けて貰えるらしい口ト。

壁のガラスはハイドロポンプでも撃った方が早いから、スマホから着替えてウオツシュしとく口ト。」

マキ「うん。ありがとう。クーガ…」

学園の家庭科室は、生徒なら誰でも使える施設である。そこでは生徒がポロックを作ったり、ポフィンを作ったりする。そして、本作で俺ツエーしまくる結月ゆかりさんの作った物は

ゆかり「……………カレー」

ずん子「へえ、カレーねえ？」

ゆかり「……………」

ずん子「アレが？」

ずん子が真っ黒く、歪み、そして、ケミカルに輝くナニかを指差した。

ゆかり「……………」

ずん子「ゆかり？あのアローラベトベトンみたいな汚濁を、あなたはカレーと呼ぶんですか？」

ゆかり「……………」

ずん子「都合が悪いとだんまりが貴女のクセですが、今回ばかりは許しませんよ？」

マキ「ゆかりちゃん、こんなに料理苦手だったっけ？」

昔は普通にカレー作ってたと思うけどなあ」

ずん子「それは、これが原因ですよ！」

ゆかり「……………!!」

ずん子は多少強引にゆかりの腕を取り、袖を捲る。すると、色に変色したゆかりの腕が露わになる。



マキ「ゆ、ゆかりちゃん……この腕は!？」

ゆかり「……………」

ずん子「はあ……わたしも先週、入院していた病院で偶然  
気付いたんです。」

どうせゆかりが話す訳が無いと、ため息をつくずん子。

マキ「ロケット団戦のダメージで入院してた時だね。」

ずん子「ええ。同室でしたから、色々観察の機会はありましたか  
ら。」

そんな友人達の非難の目を他所に、話は終わったと袖を戻した。

ずん子「思い返せば、きりたんとバトルしたときから、明らかに物  
理法則にツバを吐くようなボールを投げてましたよね？」

マキ「ずん子ちゃんとのバトルの時も……だね。」

ゆかり「……………」

ずん子「……………」

ゆかり「……………」

ずん子「ゆかり、アナタが何をやっていてそんなケガをしているの  
かとか、性格やバトルスタイルが明らかに陰キヤだとか、人間性に欠  
点がある狂人だー色々言いたいことはありますけどね……………」

ゆかり「ずんだに狂ったヤツに狂人扱いされたくないですが」

ずん子「今回初めて口聞いたと思っただらそれか絶壁!!?ぶつ殺してや  
る!!!」

マキ「まあまあ……………」

マキは調子が戻ってきた友人に頭を悩ませながら、どうにか宥めていく。

泣きそうな自分を誰か助けて欲しいと願いながら。

ずん子「はあ．．．はあ．．．！」

ゆかり「．．．．．（っーん）」

マキ「．．．．．（泣）」

ずん子「アンタもう．．．本当にもう．．．ちよつとはわたしに『可愛い女の子』である配慮とかですねえ．．．．．！」

ゆかり「ないもー！むぐっ!?!」

マキ「ゆかりちゃんお願い。もうお話を聞いて上げて。そろそろ茶化さずにお話を聞いて上げて。

私の方が持たない。

ずん子ちゃんももういい加減にケンカしないで。」

神速でゆかりの口を覆ったマキは、半泣きで黙らせにかかる。もう良いだろう。頼むからもう止めてくれと。

ゆかり「．．．．．。」

ずん子「．．．．．。」

マキ「．．．．．（睨み涙目）」

ゆかり「．．．．．で、何だつて？」

ずん子「．．．．．い。」

ゆかり「はあ?。」

ずん子「．．．．．ケガしたり、寝不足だったり、一人で背負い込んで大怪我するくらいなら．．．．．ちよつ

とくらい頼ってごい。……………バカ」

ゆかり「……………」

マキ（ずん子ちゃん……………）

ずん子「わたしの方が料理上手いし、眠いなら寝る時間くらい稼げるし……………ケガは、ほら。」

なによりわたしの責任なんだし。

ゆかりの身の回りの世話は、わ、わたしの役目だから!!」

ゆかり「……………」

マキ「ずん子ちゃん……………」

（あのメンヘラと癩癩とずんだ餅で出来たようなずん子ちゃんが、こんなな思ったことを言い切れるなんて……………）

友達の成長に、感動と喜びを覚えるマキ。

しかし、二つ忘れる事なかれ。

一つは、なにもずん子が落とし前を付けなければならぬのは『結局ゆかり』だけではないこと。

弦巻マキの所持する伝説のポケモン『フリーザー』の【マヒヤド】を自身の【ポケスキル】で乗っ取り、操ったこと。

それ自体は、マキ本人が【マヒヤド】の意志にある程度委ねるとし、現在きりたんの『ハガネール』の【ハガネまる】と共に戦闘時のダメージを回復させたのち、話をするとして、保留になった。

そして一つは

ゆかり「……………」

マキ「ゆ……………ゆかりちゃん……………?」

東北ずん子の言葉を聞いた結月ゆかりが、特に心に響いている様子が無いことだ。

マキ（ゆかりちゃん……まさか、変なこと言わないよね……??）

ゆかり「……………分かりました。じゃあ、頼るとしましようか。」

ずん子「ー!!」

マキ「ゆかりちゃん」

ゆかり「ここはもう使えませんから、学園の外でカレー作ってきて下さい。」

ずん子「……………え?カレー?!」

ゆかり「そろそろ初等部の森の試験が始まって一時間半。早ければガキどもが戻ってくるころで……………」

突如、学園放送が流れる。

《緊急警報です。現在【試験の森】で異常事態発生。学内の技術士の方は至急、【試験の森】ゴール地点までお越し下さい。繰り返しますー》

ずん子「緊急警報!？」

マキ「技術士を呼んだってことは機械系のトラブルかな?」

ゆかり「……………」

二人が放送について話し始めると、ゆかりはすぐに踵を返して部屋を出る。

ずん子「ちよつとゆかり?何処行くの?」

ゆかり「修理費について、早めに話入れてきます……………カレー、任せましたよ。ずんだ。」

間違ってもグリーンカレーなんてほざいてずんだなんか入れないで下さいよ。」

ずん子「みんなで食べる物にずんだを入れたことはないですよ！」  
背中を見送るずん子。

クーガ「マキ。ハイドロポンプで水洗いと、ぼうふうとオーバー  
ヒートで乾燥終わったロト。」

「

マキ「あ。ありがとうクーガ。」

クーガ「背後でゆるゆりされてる中静かに掃除を完了させるボクは  
超優秀ロト。」

マキ「うん。すごく助かったよ。クーガ。せっかくだから、ずん子  
ちゃんのカレー作りも手伝って上げて欲しいな。」

クーガ「シヨツピングから調理までお任せロト」

マキ「よろしくね、クーガ。」

マキ「……………私も、ゆかりちゃんに着いていってみよう」